

今年初めに東京オリンピック開催の1964年を舞台にした映画「ALWAYS 三丁目の夕日」64が公開され大ヒットしたことをおぼえておられるだろうか。米国でも「マッドメン」や「パンナム」といった60年代を舞台にしたドラマが流行している。また映像だけではなく、ここ数年、世界的に60年代に関わる書籍が出され、60年代への関心が再び高まっているようなのである。

●生々しい一体感

佐藤信（88年生まれ）の『60年代のリアル』（ミネルヴァ書房・2011年）は、東大法学部在学中、60年代の若者の反乱に関するコラムを新聞に連載したことをきっかけに書物にまとめられたものである。当時の若者たちの生々しい肉体の一体感（「皮膚を通じた肉体的感覚の『同期』」）に対する憧れと反発とが混じり合った奇妙なテキストの書物になっている。ただどちらかと言えば、著者の基本的関心は、60年代世代よりも自分たちの世代の現状にあることは容易に推察できる。

過去にも東大法学部学生だった北野隆一の『プレイバック』東大紛争』（講談社・90年）という著作があり、60年代を自分たちの現状を考える手がかりにしているという点では多少の類似性があるかもしれない。こうした若い世代の仕事に對

して、60年代を高校生として体験した四方田犬彦（53年生まれ）は『1968年文化論』（平沢

「60年代」への関心高まる

東京経済大学教授 桜井 哲夫



てこないだろうと指摘する。確かに、単なる体験密着型の論述からも頭でっかちな観念的な論述からも60年代の姿は誰にでも理解可能な形では伝わってほかないだろう。

四方田らの編著に収録の諸論考は、60年代文化の音楽、舞台などの祝祭的性格を論じているが、パリで5月革命に遭遇した西川長夫（34年生まれ）も「文明批評としての祭り」を実感していた（『パリ五月革命私論』



平凡社新書・11年）。

一方で、四方田よりもやや若い小野俊太郎（59年生まれ）の『明治百年 もうひとつの1968』（青草書房・12年）は、60年代日本の大衆文化を手がかりにして現代社会との接点を一つずつ丹念に紹介して好感が持てた。公害問題（水俣病やカネミ油症事件、大気汚染）、電力の安定的提供を目的とする原子力発電への道、郵便番号制度による地域管理、国民的ヒーロ

現状を考える契機に



60年代に起きた様々な現象はその後の社会につながっている
イラスト・よしおか じゅんいち

●始まりと終わり

とはいえ、今村仁司が『近代性の構造』（講談社・94年）で言うように、68年を「近代二百年の歴史的経験」及び「資本主義と社会主義」という2つの体制への決別を告げる切っ掛けとするなら、問題は単純ではないのだ。今村は、17、18世紀を「第一の近代」とし、フランス革命後から20世紀までの「第二の近代」の終焉が、68年から始まったのだと述べた。むしろ、「第三の近代」の具体的な姿はいまだに見えてこない。

1・モデルとしてのスポーツ選手の出現、テレビアニメの「サイボーグ009」と国内最初の「心臓移植」の同時性など、小野が紹介してゆく60年代に出現した現象は、その後の社会を根底で規定していることに気がつく。

今を 読み解く

「一九六八年はすべてを変えてしまった年ではなかった。それまでにあまりにも多くのことがすでに進行しつつあった。だが『六八年』以後はほとんどなにひとつ、もとのままでなくなつた。そしてこの意味で『六八年』は、いたるところにあったのだ」
EU危機、さらに世界金融不安のただなか、60年代以後、何が始まり、何が終焉し始めているのか、再び探究し始める時代に入ったのだと言えよう。